

⑤ 上陸地……舞鶴港

⑥ 収容期間……四年間

(十一) 帰国後の生活

昭和二十四年七月帰国。村民の厚意と要望により

昭和二十四年十二月役場職員に採用され、地方公

務員となった。

## 抑留中の労苦記録

山梨県 渡辺 時雄

(一) 出生から入隊まで

① どこで出生……山梨県南都留郡忍野村忍草

② いつ出生……大正七(一九一八)年三月十日

③ 学校……陸軍士官学校(予科)

(二) ソ連軍侵攻前

① いつ入隊……昭和十三(一九三八)年一月十日

現役志願兵

② 入隊場所……陸軍重砲兵学校 神奈川県横須賀市

③ 駐屯地……満州国滨江省阿城

戦地……南方フィリピン、満州国図們

(三) ソ連軍侵攻をどこで受けた

① いつ……昭和二十年八月十日夜中

② どこで……満州国東寧県図們とソ連国境陣地(要塞)。

ソ連軍が戦車で突然攻撃してきた。

③ どんな状況で……私も九六式一五〇重砲隊は要

塞陣地の山頂中心部にあつたので、戦車は攻撃し

ないで通過した。

(四) 終戦

① 詔勅……昭和二十年八月十五日正午、自隊の九六

式超音波無線機で傍受した。

② 感想……まさか敗戦とは、自決しようと思った。

③ どう終戦したか……詔勅に従わず決戦と決めた

が、軍司令部高官の使いでやめた。

④ 武装解除から収容所入まで……八月二十日朝、陣

地を破壊し、自動貨車に分乗し一個中隊揃って一

泊二日行軍し、延吉市(間島)の野戦兵器廠(収

容所)に入り武装解除、収容された。

(五) シベリア抑留地への移送

① いつ頃……九月一日頃、作業大隊千人に編成され、徒歩で間島収容所を出発し、十日歩いてソ連領に入った。

② どの地点からどこへ送られた……間島から徒歩で国境を越え、ク拉斯キー駅に着いた。

③ どのように……牛馬の貨車に閉じこめられ、昼は停車、夜行でコムソモリスクへ。

何日くらい……七日間

④ 第一次入ソ場所……コムソモリスク第二収容所、約二千人入った。

いつ……九月二十日ごろ

(六) 抑留地の生活

① 第一次収容所はどこ……コムソモリスク。十日後、約二〇km山中の第八分所に収容された。

収容人員……二千人

② 生活の様子

住まい……(第八分所の状況)半地下式木造、一棟百人くらい。五棟あり

食事……満州からの押収品(コーリヤン、アワ、大豆)

仕事……山林伐採

ノルマ……二人一組、三立方メートル

衣服……着たまま 入浴……月一回

シラミ……多発

南京虫等……多く、夜寝られなかった。

伝染病……多発。赤痢、チフス

③ 作業の状況

主作業……森林伐採、薪づくり(二人鋸)

ノルマ達成状況……薪づくりは一〇〇%やった。

単位……個人。二人一組で薪三立方メートル。

中隊または収容所……収容所では平均六〇%ぐらい。

い。

グループ……私の中隊は毎日一〇〇%達成。

④ 給与……規定の給与量は掲示してあったが、現物、特に糧秣は半分くらいしか配給されなかった。特に冬期、雪で交通が閉ざされ糧秣受領できず。

(七) 労役

① どのような労役についたか……抑留から昭和二十二年秋までは森林伐採、昭和二十三年は街の住宅建設人夫。

② 収容人員……第八分所Ⅱ五百人、第二収容所Ⅱ二千一人

宿舍……半地下式の木造家屋

③ 冬最低温度……零下五〇度まで下がった、零下三〇度以下は屋外作業なし。

冬はどうして生活したか……伐採から帰るとき一人一本丸太をかついで帰り、燃やして暖をとった。

「労役が一つに止まらなるときはどうしたか……伐採は健康者。農作業、使役は病弱者とした。

④ 労役の時間……毎日九時から五時、計八時間。  
内容……ノルマ制によった。

⑤ 労役に堪えられない者はどうされたか……弱者は三級として休養室へ、病人は中央病院送り。

⑥ 健康管理は……毎月一回ロシア軍医が診断して、

一、二、三級に分けた。

⑦ 常日頃健康を保つ上で役に立つことは……助け合ひ、気力を保つよう励まし合った。山野草を食べた。

⑧ 衣服について扱われたことは……着の身着のまま、死んだ戦友は裸で埋められ、遺品を配給され、みんなで分けて着た。

(八) 抑留者の統制管理

① 労役につく基準……一級、二級の健康者は重労働、三級以下は軽作業。

② 労役免除……三級以下の病人、特に熱発者。

③ 健康管理……収容所内は寒く不潔で、栄養が採れず不良である。

④ 点呼・作業場への出入……毎朝晩点呼、作業場への出入に衛門前点呼。

⑤ 着衣・衣服……収容所へ入った時の衣服で帰るまで。

⑥ 休日……日曜日、雪の日、零下三〇度以下の日。

⑦ 収容所施設、構造……第八分所は木造丸太造り。

コムソモリスク第二收容所も木造半地下丸太造り。

⑧洗脳教育……民主化グループが昭和二十一年夏から入り、二十二、二十三年と激化した。

⑨收容所生活全般……八分所では規律も良かったが、第二收容所は全般に乱れた。

⑩懲罰……作業成績のよくない中隊はサポタージュの刑があった。民主化を拒んだ者は反動分子とされた。

(九) 抑留中の生活と極限状態

①乗りこえてきた信念……生きて日本の土を踏みたい。

②生死の境、死に直面したときの感想……運を天に任せよう。

③心身を支えた工夫……よく働き、よく休む。食物を丁寧に大事によく噛んで食べることにした。

(十) 帰還

①ダモイをいつ、どこで聞いたか……收容所内で皆より一週間くらい前に收容所長から。

②集結地……コムソモリスク第二收容所から汽車でナホトカへ。

③乗船名……山澄丸

④船内生活……一時船上で闘争があったが、その後は平穏であった。

⑤收容期間……昭和二十年九月―二十三年九月まで、三年一カ月

(十一) 帰国後の生活

日本の警察から共産主義者ではないかと警戒されたが、忍野村役場の職員に採用されてから、公務員として真面目に勤務できた。

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

①戦争などすべきでない。国を守ることは国民の義務であるが、国と国との争いは平和裡にお互いの話し合いによって解決するよう、双方の国民が常に仲良くすることが大切である。

②家庭を大切に夫婦仲良く、親を大切にし祖先を尊び、兄弟睦まじく暮らすという、昔の良風を作らなければ日本の道徳が壊れてしまう。